

秋元波留夫・上田 敏
精神を病むということ

(A 5 判 326 頁 4,635 円 (税込) 1990 年 医学書院 刊)

藤井 克徳

(共同作業所全国連絡会事務局長)

古くは 1964 年の「ライシャワー事件」、最近ではつい 1 か月前の「元労相刺傷事件」。いずれも精神障害者が関与した出来事であった。一般的に描かれている精神病患者像あるいは精神障害者像は、こうした「事件」と無縁ではなさそうである。

現に、友人や知人の多くが言う——「作業所では大丈夫?」「怖くない?」——そのたびに懸命に説明する。精神障害者による犯罪の割合が、健常者に比べいかに少ないか、しかも犯罪時、その約 7 割が無目的で、孤独な在宅生活にあり、社会復帰対策の立ち遅れが、「事件」の背景に結びついていること、そして共同作業所での社会復帰を目指しての真面目な活動ぶりを付け加える。

それにしても考えてしまう。精神障害についてもっと知りたい。言うまでもなく医学的に深めることが我々の本旨ではない。就労を含めた地域での生活をいかに援助

していくか、すなわち能力障害やハンディキャップに対して、より適切に対処できる力が欲しい。世間の偏見や無理解に対しても、これを頭ごなしに批難するだけではなく、わかりやすく話せる力を身に付けたい。

これまで精神障害についてトータルリハビリテーションという視点からの簡潔な学習書はほとんど見当たらなかった。それでも昨今いろいろな立場の共著による総合書が刊行されはじめているが、全体を貫く理念・思想という点ではやや整合性に欠け、今ひとつピンとこない。その意味で、本書はコンパクトでありながら（それでも相当の字数）、見事に構造化・体系化され、まさに待望の書である。質量ともに豊富で、「知識の玉手箱」といった感じもあり、どの頁をめくってもついつい吸い込まれてしまう。

本書の特徴は、大きく分けて 3 つある。その第 1 は、入門書と専

門書の 2 つの性格が同居し、読者層を全方位的に捉えていることがあげられる。同時に時の人物やエピソードが盛り込まれ、理解しやすい。第 2 に、秋元波留夫氏と上田敏氏の対談ということもあって、精神障害の領域とリハビリテーションが高い次元で統一されている感がある。特に、「精神障害者観」について、科学と人権思想の両面から迫ることの大切さを、全体を通して鋭く問いかけている。第 3 に、本書が対談という形式をとっていることもあって、実に読みやすく、わかりやすいということである。語り手（秋元氏）の凄さは言うに及ばないが、聞き手（上田氏）の引き出し方も超一流である。

わが国の精神障害者をめぐる状況は、法制面はもとより、人々の意識面も含めてとても先進国とは言いがたい。しかし、この現実を嘆き悲しんでいるだけでは、何も変化は生まれない。関係者が手を携え、もっと知恵を蓄えていかなければならない。本書はリハビリテーションをキーワードに、医療と福祉、病院と地域をつなぎ、立ち遅れた精神障害者対策の地平を拓くうえで、かけがえのない役割を果たすに違いない。